教団新報

定　価　1部150円（本体137円〒共214円）
予約購読料　1年分　〒共　5,350円
紙代のみ　3,750円
振替 00140－9－145275
本紙を購読ご希望の方は、前金をそえて、お近くのキリスト教書店へお申し込み下さい。
教会の購読料は負担金に含みます。

発行所　日本基督教団
169-0051　東京都新宿区西早稲田2-3-18
日本キリスト教会館内　電話03（3202）0546
FAX03（3207）3918
URL http://uccj.org
発行人　秋山　徹
編集主筆　嶋田恵悟
印刷所　株式会社きかんし

2021年度 ③ 四国・兵庫・九州・沖縄 教区総会報告

選挙をめぐり様々な対応

新三役
左から東島議長、上内副議長、柳本書記

四国教区

教会間のいっそうの連携を願って

四国教区第79回定期総会は、新型コロナウイルス感染防止の観点から、昨年度第78回定期総会同様、議決権行使書を用いての書面開催となった。

書面により開催することについては2020年度第4回常置委員会（12月）で決定していたので、計画通りと言える。ただし、改選期にあたり、教区三役・常置委員の選挙をどうするかが課題となった。常置委員会では、総会の付託を得た上で各分区毎に投票会場を設けて選挙会を実施する案も審議されたが、管理運営の難しさとなお残る感染リスクへの懸念からこの案を見送り、教区三役・常置委員とも一期2年の留任を総会に提案することを決定し、総会で承認された。その際、常置委員1名が教区総会議員に登録されなかったため、第77回定期総会で選出された補充員をあてた。

【信徒】遊口百合子（西条栄光）に代わり、西村大吉（久万）

この他、2020年度諸報告と決算、2021年度計画と予算、各部委員選考、常任委員選任等を取り扱い、いずれも可決承認された。2021年度教区教会互助は、経常会計から330万円繰り入れて、2631万3416円の予算（14教会・伝道所への援助）である。准允式については常置委員会に付託し、常置委員会で審議、承認、執行した。堤健教師（佐川教会主任担任、高知教会担任）が受允した。

四国教区では、現在、教会会互助をめぐる状況が厳しさを増している。互助を実施するために2020年度は経常会計から60万円、2021年度は330万円を互助会計に繰り入れた。加えて、互助受給を希望する教会は今後増える見通しである。この様な状況を受けて、常置委員会は「互助制度検討小委員会」を設置して、互助制度を抜本的に見直す作業に入っている。と同時に、教会間のいっそうの連携を願って、「教区教会間交流費援助」や「週ごとの御言葉」（教区教師による小説教集）の取り組みも始めた。協力関係の深化のためには互いによく知り合うことが肝要だからである。

また、ハラスメント相談窓口を整え、リーフレットを作成、各教会に配布した（5月に配布）。

（松井暁郎報）

兵庫教区

謝儀保障制度運用指針を改定

第75回／「合同」後52回兵庫教区定期総会は、議決権行使書による書面開催となった。開催に先立ち重要議案の事前説明会をオンラインで行い、録画を公開し、報告書を全議員に送付した。その上で、5月30日～8月17日の期間に、議案の採決を行い、各選挙を6往復の郵送により順次行った。

議案は全て可決されたが、法定議案以外に、「合同」のとらえなおし：その取り組みに関する件、同性愛者をはじめとするセクシュアル・マイノリティ差別問題に関する件、第41総会期常議員会に対し「日本基督教団の教師論撤回を求める件、謝儀保障制度の運用方針の指針改定に関する件などが可決された。謝儀保障制度は、約10年の検討を経て、その運用が大幅に拡充されることとなった。

准允・按手は、総会開催中の6月24日に、教区クリスチャン・センターにて議長が代表して執行し、ライブ配信し祈りを合わせた。

三役選挙結果

【議長】東島勇人（兵庫松本通）、【副議長】上内鏡子（神戸イエス団）、【書記】柳本和良（鈴蘭台）

常置委員選挙結果

【教職】若林一義（芦屋西）、松本あずさ（はりま平安）、竹内富久恵（神戸愛生・北須磨）、森なお（加古川東）、栗原宏介（岡本）、小林聖（豊岡）、西脇正之（摂津三田）

【信徒】宮本真希子（甲東）、柳あつ子（須磨）、森章一（神戸栄光）、北村大昂（豊岡）、柳谷舟子（甲南）、増岡広宣（西宮門戸）、松田道子（東神戸）

教団総会議員選挙結果

【教職】東島勇人（兵庫松本通）、若林一義（芦屋西）、柳本和良（鈴蘭台）、上内鏡子（神戸イエス団）、西脇正之（摂津三田）、森なお（加古川東）、橋本いずみ（西宮一麦）、佃真人（淡路三原）、岩住賢（神戸神愛）、竹内富久恵（神戸愛生）、手束正昭（高砂）、安東優（飯盛野）、橋本直行（姫路）

【信徒】森章一（神戸栄光）、北村大昂（豊岡）、片山仁史（広石）、柳谷舟子（甲南）、柳あつ子（須磨）、植松恵美子（鷹取）、愛原惇士郎（兵庫松本通）、橋崎恵子（姫路和光）、古林清造（畦野）、有森和可奈（北六甲）、則竹俊治（高砂）、宮本真希子（甲東）、増岡広宣（西宮門戸）

（柳本和良報）

九州教区

10地区と教区事務所をオンラインで結び投票

第71回九州教区総会は、昨年度に続き新型コロナウイルス感染症対策のため一堂に会せず、5月に議決権行使書によって開催した。それに先立ち、5月5日に議案説明会をオンラインにて行った。

2020年度の各報告や決算、新年度の予算、2021年度から2022年度の宣教基本方策、全議案が可決された。

また、総会議場で行っている准允式は、日下部遣志議長により3名の准允式が6月に各教会（会場）で執り行われ、1名の按手礼式も10月に執行予定である。

選挙は当初5月17日に予定していたが、コロナの感染拡大のため延期し7月26日に選挙会を行った。教区内10地区の会場および教区事務所をオンラインで結び、各会場および個々人がいる場から電子投票システムを使って投票を行った。

教団総会議員選挙は、昨年度は任期延長を決議したが欠員もあり、7月開催の常議員会に間に合わせるべく、書面とオンラインによって6月に行った。

広域でもある九州教区が年に一度、一堂に会することが出来ないことが2カ年続くことは痛みであるが、新たな教区の体制によって、協力連携しつつこの時を乗り越えることを希望したい。

三役選挙結果

【議長】日下部遣志（川内）、【副議長】西岡裕芳（福岡警固）、【書記】竹内款一（長崎銀屋町）

常置委員選挙結果

【教職】深澤奨（佐世保）、川島直道（錦ヶ丘）、西畑望（国分）、多田玲一（福岡女学院）

【信徒】上垣明美（行橋）、浅野直人（福岡警固）、伊津見七生子（若松浜ノ町）、坂上剛（長崎馬町）

教団総会議員選挙結果

【教職】日下部遣志（川内）、西岡裕芳（福岡警固）、深澤奨（佐世保）、青山実（名瀬）、川島直道（錦ヶ丘）、竹内款一（長崎銀屋町）、梅崎浩二（大牟田正山町）、戸田奈都子（川内）、本多香織（瀬戸内）、西畑望（国分）、北畠友武（門司）

【信徒】小深田信昭（国東）、小西眞二（福岡中部）、今村泰子（長崎銀屋町）、富永功（有田）、上垣明美（行橋）、坂上剛（長崎馬町）、小園豊（鹿児島加治屋町）、黒木智（都農）、東隆義（田川）、山下洋子（延岡三ツ瀬）、福山裕敏（武蔵ヶ丘）

（竹内款一報）

沖縄教区

書面による審議・評決

6月27日に書面による審議・表決。正議員51名中、47名出席にて総会が成立した（表決回答書の提出を以って出席扱いとした）。

議案第1号「議事日程承認に関する件」賛成47名、可決。議案第2号「総会特別委員選任に関する件」賛成46名、可決。議案第3号「うるま伝道所廃止に関する件」賛成40名、可決。議案第4号「2020年度沖縄教区経常・特別・収益会計決算報告承認に関する件」賛成47名、可決。議案第5号「2020度沖縄キリスト教センター事業及び収支決算報告承認に関する件」賛成47名、可決。議案第6号「F・キソール宣教師記念事業準備委員会の設置に関する件」賛成44名、可決。議案第7号「特別会計『研修センターなきじん資金』に関する件」賛成41名、可決。議案第8号「2021年度沖縄教区経常・特別・収益会計予算案承認に関する件」賛成47名、可決。議案第9号「2021年度沖縄キリスト教センター事業及び収支予算案承認に関する件」賛成47名、可決。議案第10号「第81回沖縄教区定期総会議事録確定に関する件」賛成46名、可決。

（玉城凉子報）

新型コロナウイルス
感染拡大の渦中で

大学で仕える教師の声に聞く

吉松　純《金城学院大学 宗教主事》

コロナ禍にあるチャレンジと祝福
―キリスト教主義学校の存在意義

教育機関の多くがそうであったように、金城学院大学も昨年、新学期を通常通り迎えることができませんでした。ゴールデンウィーク明けに試験的に遠隔授業を始め、6月に本格的に遠隔授業を開始しました。これで授業の体裁は整いましたが、金城の誇りは、何と言っても週5日、毎朝8時45分から9時に行っている礼拝です。木曜日には昼礼拝もあります。学生、教職員と近隣牧師方の協力で守ってきた礼拝をどうするか。私たちは話し合い、動画配信をすることにしました。

5月は無人のチャペルで説教をして動画を製作し、試験的に学生と教職員に配信しました。これは思ったよりも難しいことでした。通常、チャペルで説教をしますと、熱心に耳を傾ける学生もあれば、あくびをする者、居眠りする者などが一目瞭然で分かります。しかし誰もいないチャペルでは、説教を通して御言葉が届いているのか、いないのか分かりません。しかし礼拝の灯を消してはいけない、との思いを抱いています。

6月からは出勤している職員と、実験、実習などで登校している学生にマスク着で対面礼拝を実施しました。通常の10分の1程度の人数でしたが、対人での礼拝の喜びはひとしおでした。一方、礼拝の動画配信も続けましたが、一つ問題が起こりました。例年、キリスト教学の授業の一環として1年生は前・後期15回ずつの礼拝出席を必須にしています。しかし動画配信では回数が分かりません。そこで私たちには負担になりましたが、礼拝動画視聴を前期7回以上、後期10回以上としてレポートを課しました。大学のオンライン掲示板に掲載された何百というレポートを読むのはかなりの作業でしたが、幸い（?）その多くは説教の概要をサラっと書いたものでした。しかし中にはしっかりと御言葉を受け止め、深く考えて応答しているものもあり、それらは私にとって大きな喜びとなりました。

礼拝動画の配信は宗教主事だけでなく、編集を担当したキリスト教センターの職員にもかなりの負担でしたが、昨年度は最後まで継続し、今年度も緊急事態宣言発出中は配信を再開しました。少しでも御言葉を学生と教職員に届けたいという願いからです。

さて、キリスト教主義学校の存在意義はどこにあるでしょうか。勿論、高等教育機関である以上、アカデミックに優れた学び舎であるべきことは言うまでもありません。でもそれだけだったら他の大学と何ら変わりません。では何でしょうか。言うまでもなくキリスト教の信条、教育理念を持ち、間接的また直接的に御言葉を宣べ伝えることです。それなくして何のキリスト教主義でしょう。「御言葉を宣べ伝えなさい。折が良くても悪くても励みなさい…」（二テモテ4・2）。

私はアメリカで四半世紀に渡り牧会し多くの困難や喜びを経験しましたが、金城でも日々新たなチャレンジと祝福を受けています。

五十嵐成見《聖学院大学 チャプレン》

伝道への柔軟さが問われている

2020年4月、入学式が取りやめとなり講義自体もゴールデンウイーク明けまで休止を余儀なくされた。5月よりオンライン学習支援サイトを全面的に利用した講義が始まり、暗中模索の船出となると共に、寝不足の日々が続いた。

チャプレン会は、礼拝は何としても毎日行い続けることが重要との見解で一致し、「聖学院キリスト教センターフェイスブックページ」を立ち上げ、説教者を映す動画礼拝と文書礼拝（説教をスクロールで流す形式）を発信する方法を採用した。キリスト教音楽会、キリスト教講演会、クリスマスツリー点火祭も全てフェイスブックページを通して配信することとなった。

結果として通常の対面礼拝では40～50名の出席であるが、1000回を超える再生回を数える礼拝もあるなど、オンラインによるインフルエンスを予期させることとなっている。2021年度は、対面とオンラインのハイフレックス形式を採用しているが、オンラインは常時300回ほどの再生数であり、関心の高さが伺える。率直に言って意外な結果だった。アーカイブスとしても機能しており、気になった礼拝を繰り返し視聴することが可能となっている。

一方で、福音の伝達という形としてのオンラインの効能はあるものの、礼拝のプレゼンスとしてはチャペルでの対面にはやはり敵わない。オルガンやピアノの響き、説教者の表情や仕草、チャペル前方に掲げられた十字架を仰ぐことなど、チャペルに来なくては感じ取ることのできないエートスが、信仰の育みの大事な側面となっていることに気づかされる。また諸教会の礼拝を体験する教会出席レポートも休止を余儀なくされている。

学生のサークル活動も、コロナウイルスは甚大な影響を及ぼしている。通常の勧誘ができないため、サークルの加入者が減って後継者不足に陥り、休止へと追い込まれるサークルが出てきている。

そんな中にあってクリスチャンサークルSCF（Seigakuin Christian Fellowship）は希望のともし火だ。ライン、ツイッター、インスタグラム等の様々なSNSを活用して宣伝を行い、今年度は細心の注意を払い感染対策を行った上、顧問が常駐する形（感染対策指導役）で聖書研究を行い、常時20人近くの学生が集う。しかもノンクリスチャンも多く集っている。伝道の停滞があってはならないと忘すクリスチャン学生の祈りと実行力の賜物であり、積極的にツールを活用して着実な活動を展開している。恒例の合宿は今夏もオンラインで行った。対面のリアルな関わり合いには敵わないが、参加する学生の表情は明るく、一緒に参加して励まされた。

結果として、私たちチャプレンは、コロナ禍を通して学生から多くを学ばされている。学生たちの柔軟な姿勢は、現状維持の対応に留まる教会の伝道のあり方に、重要な一石を投じているように思われる。

小﨑　眞《同志社女子大学 宗教部長》

つながる―予測できない未来を見つめて

2019年度末より続く感染症（COVID―19）拡大の猛威に襲われ、様々な苦境へ対峙しつつ新しい学修を模索する時を強いられた。中止・延期等の対応を余儀なくされたプログラムも多々あったが、学内外の方に支え祈られ、地道な歩みを継続できたことは感謝に堪えない。タイトルに掲げたものは、学内会議で議論を重ね決定した「2021年度宗教部年間テーマ」である。

昨年度春学期、遠隔授業実施に伴い、授業期間中（5日×15週）、毎朝10時30分にネット礼拝を配信した。初挑戦ゆえの苦労もあったが、学外講師をはじめ宗教部スタッフの献身的なサポートに支えられ、多種多様な礼拝（文字原稿提示、賛美の提供、録画・録音配信、ライブ配信等）を滞りなく実施した。「春の宗教教育強調週間」の代替案として「新入生歓迎礼拝」を設定し、厳しい現実を強いられている新入生に向けた励ましのメッセージを届けた。目に見えないが確実に存在する「つながり」の実感を願い、配信を継続した結果、春学期には延べ4万2000回弱の視聴があった。さらに、「パイプオルガン企画」など、コロナ禍ゆえにこそ与えられた掛け替えのない宝があった。

1年半以上にわたる不安と不自由の現実の只中で、多くの気づきや学びがあった。いわゆる「web」システムを用い、物理的隔たりを越えて相互に繋がる喜びを分かち合うこともできた。倫理学者、心理学者のC・ギリガンは女性の具体的な語り（異なる声）の中に、「他者のニーズへの敏感さ」や「ケアに対する責任の引き受け」を読み解き、自らの中に他者の視点を含む「web」関係の意義を明示した。「web＝クモの巣」は、弱々しいクモの糸の「つながり」の只中に敏感に共振・共感する有機的応答性、さらに縦横無尽な広がりと世代や時間を越えた拡散を創出する。その関わりは伝統的な正義や権利・義務への同化を前提とした階層的秩序の維持とは異なる視座を提示する（Carol Gilligan『もうひとつの声』参照）。

同志社の創立者新島襄は「都合の良い合理性」に抗い、同志社を退学させられた「都合の悪い」学生たちに思いを馳せ「人一人ハ大切ナリ」と語った。同調圧力による結束や人間の思いに縛られた団結に対抗し、生命の個別性に敬意を払い続けた。さらに新島は「スピリチャル・ユニオン」との新たな「つながり」の創出を願った。

分断と対立が加速化する時代状況にあって、既存の価値観から解放され、主にある新たな「つながり（ユニオン）」へ招かれたい。異なる他者との出会いによってこそ、人は想定外の力を与えられるのかもしれない。合目的化されない「弱いつながり＝web関係」の只中で、想定外の他者の声に呼び出され、新たな世界に希望を紡ぐ者でありたい。

2021年度 新任教師オリエンテーション

2021年度の新任教師オリエンテーションが、A日程（6月28～29日、おもに昨年度の新任教師を対象）、B日程（8月2～3日、おもに今年度の新任教師を対象）と2回に分けて、オンラインで開催された。双方の日程とも講師も講演も同じ内容であるが、閉会礼拝をA日程は雲然俊美書記、B日程は久世そらち副議長が担当し、新任教師が教団三役と接する機会を持った。

今回の参加者は、A日程が新任教師46名、B日程が47名で、それに教団・講師・神学校関係者他A日程23名、B日程26名を加えた人数の参加であった。対面でなく、オンラインということもあって、参加者同士が交流を深め合うのは物理的に困難で、また時間的にも制限があったが、それでもコロナ下での画面越しの、久しぶりの再会を喜び合う声が聞かれた。

＊

一日目は古旗誠教師委員長による開会礼拝のあと、石橋秀雄教団議長より「伝道を共に担う教団の教師～コロナ下の伝道」という題で講演がなされた。昨年3月以降、コロナ下で幼稚園と教会がどう歩んできたかが語られた。コロナ下でも教会に連なる礼拝がそれぞれの場所で捧げられ、神の救いが起っている喜びが語られた。

牧会講話（A日程では二日目、B日程では一日目）は、川内教会の戸田奈都子牧師を講師として、九州の地での伝道・牧会の経験を踏まえた話を聞いた。自分が遣わされた教会だけでなく、教会が立っているその地域のことをよく知り、その町の歴史をよく学ぶこと、そこに生きて暮らしている人々と共に歩んでいくことの大切さが語られた。また十字架の縦の関係をしっかり軸にしながら、また十字架の横の関係として人とのつながりを大切に、人を必要なところにつなげていくことに牧会者の務めと、その地域における教会の重要な働きがあることが語られた。

新任教師たちは、引き込まれるように話を聞き、牧会についての多くの示唆を与えられると共に、大きな慰めと励ましを受けた。

＊

二日目は、講演Ⅱ「教団の教師論」という題で、秋山徹総幹事による講演がなされた。教団が戦前戦後と歩んだ歴史を踏まえつつ、教団の教師論についての豊かで、深い話がなされた。新任教師にとっては、教団について学んだばかりのことを再確認する機会となり、教団の教師としてこれから教団をどう形成していくかという大事な課題を、分団（A日程は一日目、B日程は二日目）でも話し合い、また共有することができた。

続いて教団の取り組みについて、信仰職制委員会（武田真治委員長）、予算決算委員会（宇田真委員長）、出版局（飯光局長代行・田鎖夕衣子職員）、年金局（中川義幸理事長）、部落解放センター（斎藤成二主事）、牧会者とその家族のための相談室委員会（加藤幹夫委員長）のそれぞれの活動について説明がなされた。

その後、閉会礼拝をもって恵まれた時を持てたことを感謝し、プログラムを閉じた。

（上原智加子報）

▼教師委員会▲

二つの神学校を訪問

第10回教師委員会は、6月29日新任教師オリエンテーションA日程終了後に行われた。事務局より、教団常議員会、教師養成制度検討委員会、教師検定委員会について報告がなされた。会計報告は、ここ数年減少していた神学校日献金は、今年度は若干回復し、230万弱の献金が集まったことが報告された。B日程のプログラムを確認し、分団の時間や位置などに若干の変更を加えた。

またコロナ下で訪問できずにいた神学校訪問は、6月30日に農村伝道神学校と東京神学大学を教師委員5名（一部オンラインで参加）と道家紀一幹事が訪問し、教団の教師養成のための貴重な働きへの感謝を伝え、神学校の近況を聞いた。

（上原智加子報）

▼教師養成制度検討委員会▲

「教師論」作成経緯を神学校に説明

第11回常議員会（2021年2月開催）において、議長から提案された「日本基督教団の教師論」が承認されたのを受けて、同教師論の作成に当たった教師養成制度検討委員会は、日本基督教団関係神学校を訪問して、教師論作成の経緯説明と懇談の時をもった。訪問日程は以下の通り。

◎6月14日、同志社大学神学部、関西学院大学神学部（オンライン訪問）。◎6月22日、農村伝道神学校、東京神学大学。◎7月12日、東京聖書学校、日本聖書神学校。

当初、すべての神学校を実際に訪ねる計画であったが、関西の一神学校からコロナ禍に配慮した提案があり、関西の二つの神学校はズームを用いたオンライン訪問となった。他の神学校は、一部オンラインを併用しながら、委員6名と担当幹事で訪問した。

いずれの訪問においても、開会祈祷と石橋秀雄教団議長による挨拶の後、菅原力委員長が教師論作成に至る背景と経緯について説明し、質疑応答と懇談を行った。

教団の中に多様な教会論があり、教師にも多様性が求められる現実の中で、なぜ今、教団信仰告白と教憲に基づく教師論から出発するのかという問いに対しては、多様性が本当の意味で生かされるためにこそ、一致点を明確にする必要があること、具体的な教師の務めについては、今後、教規と諸規則に基づく教師論を作成する中で取り扱うことが説明された。

また「神の主権」、「教会の公同性」、「見えない教会」といった用語の用い方についての貴重な提言や、教師養成の現場における「教師論」の取り扱いについての意見、神学校受験を考える高校生にも分かる言葉で説いて欲しいとの要望等を受けとめつつ、「教師論」の続編作成への理解を求めた。

コロナ禍への対応も大変な中、快く訪問を受け入れてくださった神学校関係者に、改めて感謝したい。

（東野尚志報）

コロナ禍の社会活動団体の支援を考える会報告

「コロナ禍にあって、日本基督教団が教会のみならず社会の課題に対してなし得ることはなにか?」。第41総会期社会委員会は2021年1月開催の委員会において、一年以上続く新型コロナウイルス感染症拡大を一つの災害としてとらえ、その中で教区・教会の関わりを通して行える支援を検討した。それにより、「各教区社会委員会を通して行政支援が行き届かない外国人労働者や生活困窮者に対する給食・生活支援活動をしている団体を紹介してもらい、その働きを支援する」こととし、10教区から28団体の紹介を得て、当該教区を通して各団体へ10万円の支援を行うことができた（教団新報第4952号、4954・55号参照）。

その後の委員会で、支援だけに終わらせずにその働きを実際に聴くことで、各地で展開されている大切な営みの学びを深めていきたいとの思いから、「コロナ禍の社会活動団体の支援を考える集い」を7月13日にオンラインで行うこととなった。開催に際しては、各教区社会委員会にも呼びかけて、かねてから懸案だった第41総会期全国社会委員長会議をこの集いに代替することとした。

「コロナ禍の中での支援団体の活動と課題について」の内容で、以下の3団体から取り組みと課題を聴いた。北海教区推薦・日本キリスト教会札幌豊平教会「手づくり弁当」（日本キリスト教会札幌豊平教会・稲生義裕牧師）、西東京教区推薦・牛久入管問題を考える会（教団原町田教会・宮島牧人牧師）、西中国教区推薦・野宿労働者の人権を守る広島夜回りの会（日本バプテスト連盟広島キリスト教会・播磨聡牧師）。

それぞれの報告は総会期末に発行する「社会委員会通信」に詳述するが、教会が主イエス・キリストに押し出されて、そこで生きる人びとの存在に向き合い支える小さくとも大切な営みを続けている現場の生の声を受けとめ味わう貴重な時となった。

（髙橋真人報）

事務局報

山田多喜男（無任所教師）

21年7月21日逝去、85歳。茨城県生まれ。62年青山学院大学、65年南カリフォルニア神学校卒業、66年より水戸新生、青山学院教会（67年緑岡に改名、現、経堂緑岡）を牧会。

遺族は妻・山田治子さん。

湯浅初江（無任所教師）

21年7月28日逝去、90歳。群馬県生まれ。71年日本聖書神学校卒業、73年より田園江田教会、つくし野伝道所を牧会。

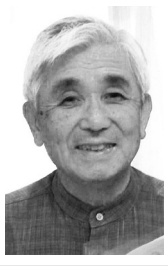
遺族は弟の妻・湯浅敬子さん。

添野匠二（隠退教師）

21年8月初旬逝去、73歳。東京都生まれ。76年東京神学大学大学院卒業、77年より茨木、岩槻教会を牧会し、山形学院に務め、山口教会を経て13年隠退。

遺族は娘・添野希和さん。

澄田亀三郎（隠退教師）



21年8月15日逝去、89歳。島根県生まれ。60年東京神学大学大学院卒業、同年より八郎潟、弘前南、広島府中、宇部、益田教会を牧会し、98年隠退。

遺族は息・澄田錬さん。

中村幸久（隠退教師）

21年8月16日逝去、88歳。大阪府生まれ。63年同志社大学大学院卒業、同年より西陣教会を牧会し、04年隠退。

遺族は妻・中村恵子さん。

教師異動

東北教区辞（巡）髙橋　力
長崎平和記念
辞（代）福田英樹
〃　就（主）堀地正弘
〃　就（担）堀地敦子
保原　辞（主）古谷次郎
〃　就（代）白井　真
大平　辞（兼担）古谷次郎
日立　就（代）島田信子

教師隠退

髙橋　力

教会離脱

恩寵

伝道所廃止

調布柴崎、中国宇治、美作

キリスト教教育主事異動

武庫之荘　辞　髙寺幸子

伝道報告

伝道のともしび TOMOSHIBI

七十二人は喜んで帰って来て、こう言った。…イエスは言われた。「あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」
ルカによる福音書第10章17節～20節

キリスト教精神に基づいた地域福祉の実践の場

大阪キリスト教社会館 理事長　**尾崎　淳**

大阪キリスト教社会館は、1950年大阪市西成区の地で「国際ワークキャンプ」に参加した青年たちの手で、建設が始まりました。その年の9月にはジェーン台風による被害があり、救助活動を支援するため、キリスト者医科連盟の医師の協力により無料診療所が開始されました。また、社会館の設立には、日本基督教団島之内教会の竹内信牧師の働きが大きな力となりました。初期は恩寵寮・無料診療所から出発、続いて日本基督教団西成教会の設立、1953年には「めぐみ保育園」を立ち上げ、保育事業を開始することとなります。

西成地区での社会館事業として、1960年に社会福祉法人として法人格を取得し、児童館を開設、ボーイスカウトや学童保育等、地域の中で必要とされる福祉事業の支援を行ってきました。1969年には「同和対策事業特別措置法」の制定で福祉事業は行政責任とされ、社会館のような民間の福祉事業が果たす役割や必要性が、地域の中で弱くなり、1970年代に入ってからは、71年に保育所が大阪市大正区に、73年には社会館本務と診療所業務が大阪府門真市に移転することにより、社会館の24年にわたる西成区での地域福祉事業を終え、新たに2つの地域に分かれて、保育事業、無料低額診療事業を続けていくこととなりました。

尾崎理事長

保育事業では2011年から大阪市の委託事業として、「千島保育所」を運営していくことになったため、現在は大阪市大正区で2か所の保育所を運営しています。

2000年代になると介護事業が地域福祉の大きな役割を担うようになり、社会館も2006年には診療事業と併設して、介護事業を門真市で開始しました。現在は、高齢者が地域で安心して生活が送れる支援として、在宅生活を中心とした事業に取り組んでいます。

また地域福祉の担い手として、行政のサービスから漏れた人たちのセーフティネットになれるように福祉事業を行っています。

2つの地に分かれて保育と医療を継続してきましたが、現在は介護を含め、「ゆりかごから墓場まで」を実践できるよう取り組んでいます。

教会は日本基督教団西成教会が西成の地に残り、門真市に移転してからは日本基督教団門真兄弟伝道所として現在も礼拝を守っています。門真兄弟伝道所では職員を始め、利用者や地域の人々が集まれる施設内伝道所として、毎週火曜日に礼拝を行っています。

大阪キリスト教社会館が創設されて72年になります。今日まで多くのキリスト者の支援と祈りの中、「キリスト教精神に基づいた地域福祉の実践の場」としての働きを続けてくることができました。地域の人の働きの場であり、また福祉事業としての活動の場である社会館の役割を、72年間無償で支え、祈ってくださった多くの先輩方の意志を、次の世代へ引き継ぐことができるように祈っています。

キリスト教社会館は日本の中で5か所（横須賀・名古屋・大阪・広島・長崎）あり、大阪キリスト教社会館の名前が消えることなく、地域の中で必要とされる場としてあり続けていきたいと願っています。

◆部落解放青年ゼミナール◆

無自覚の差別者としてではなく

昨年度の青年ゼミナールは新型コロナウイルスの影響により中止を余儀なくされた。その経験を踏まえて、今年度はオンライン開催として準備が進められた。

しかし、オンライン開催では今まで大切にされてきたフィールドワークや、参加者同士が寝食や学びを共にする直接的な出会いと交流が不可能であるという課題があった。それらを前提とし、第23回部落解放ゼミナールオンラインでは複数の差別問題についての事前連続学習会を8月12、13、16、20日に企画し、24日に全体会を行った。「インターネットと部落差別」について公益財団法人反差別・人権研究所みえ常務理事の松村元樹さん、「性差別の今」についてマイノリティ宣教センター共同主事の渡邊さゆりさん、「在日コリアン差別」について立教大学大学院キリスト教学研究科特任准教授の金迅野さん、「釜ヶ崎と差別」について摂津富田教会牧師・関西労働者伝道委員会専任の大谷隆夫さんにそれぞれ依頼し、部落差別の課題を見つめ直す会として開催した。

全国各地から30名以上の参加者、遠隔地からの講師や実行委員を含めて40名を超えるオンライン開催ならではの集会となった。それぞれの差別問題が異なる背景を持つことや、マイクロアグレッションという「無自覚かつ永続的な小さな攻撃」をわたしたちは日常で行ってしまっているという気付きも与えられた。最終日の全体会では参加者同士の意見交換などの分団協議を用いて行い、想いや課題を分かち合った。その中では青年という名称は男性的ではとの問題提起もいただいた。課題も多く与えられたが、このように場所を超えて多くの参加や講師依頼が出来、今までにない新しい出会いに恵まれた。

部落差別や様々な差別からの解放を願いつつも、自身が無自覚に差別を助長・受容してしまっている社会の一部であることを自覚することや、今まさに差別に苦しむ人と共に歩むことの大切さを分かち合う会となった。

（三浦　遙報）

ひとときの人

橘　弘之さん

自分の救いのためだけでなく

ミッションスクールである大阪女学院中高にて40年近く国語科教師として仕えてきた橘さん。万葉集や源氏物語など古典文学が専門。橘さんを通して古典の魅力に惹きつけられた生徒も少なくない。

橘さんにとって授業と同じかそれ以上に力を注いだ福音伝道。生徒たちがキリストと出会うことを求め続けた。大阪女学院は伝道の使命を明確に掲げる学校である。同労の教師たちも皆それぞれに福音伝道の思いを抱いている。そのような環境で一貫してキリスト教に携われたのは幸いであり、恵まれたときを過ごすことができたと振り返る。

橘さんは大学を卒業時には明確にミッションスクールで働く志が与えられていた。それは学生時代通っていた東京山手教会での影響が大きい。もともとカトリックの信徒であった両親のもとに生まれた橘さん。自らのいかなる努力によっても救いに達し難いと悩んでいた。大学進学で上京し、半ばおためしで出席した東京山手教会。そこで信仰によって義とされることを知り平安を得る。そして日本基督教団へ転会するに至った。東京山手教会の平山照次牧師から「自分の救いだけではいけない」、「福音伝道に死んでください」との薫陶を受けた。かつて自分の救いに思い悩んでいた青年の心は新しくキリストと共に生きる道に目を向けられる。悩める青年期を過ごす生徒たちに、福音に生きる安心と確かさを伝えたい。伝道のパッションをその後の教師生活でも抱き続けることになった。

大阪女学院を退職された現在は、ベトナムから来日している若い外国人労働者の日本語学習支援と和歌山ホームレス支援機構に属し夜回りの活動に従事している。いと小さきものの姿をとられたキリストと出会う場所をもう一度与えられているのであった。

1965年和歌山市生まれ。妻の浩子さんとともに和歌山教会員

毎年8月15日、超教派の札幌キリスト教連合会「8・15札幌平和祈祷集会」が行われる。昨年は中止となったが、今年はオンラインを併用して開催できた。オンラインのメリットを活用し、日本キリスト教会沖縄伝道所の川越弘牧師に、現地から「沖縄の叫び」との題で1時間にわたってお話しいただいた。

川越牧師は沖縄の出身ではないが、12年前に沖縄伝道所に赴任、現地での働きに携わってこられた。沖縄に多くの基地がおかれた経緯と、それによってもたらされた苦しみと悲しみ、そして基地に反対する沖縄の人々の長く粘り強い取り組みを紹介し、最後に、ご自身が沖縄に来て感じたことを語られた。

日本人（ヤマトンチュウ）の痛みは

「沖縄の人たち（ウチナンチュウ）の本当の願いは、日本人（ヤマトンチュウ）が、沖縄の人々の痛みを数倍痛んでほしいということではないか。歴史的に沖縄に苦しみを与えてきたのは日本人だ。異なる歴史に生きるものがそれぞれ自分の歴史に責任をもって生きるためには、両者が混ざり合うことではなく、日本人が沖縄の人々の痛みを沖縄の人々以上の痛みと悲しみをもって受けとめ償うことが求められている。それはとうていできることではないけれども、神の前、キリストの前に、それを目指して歩んでいかなければならない」。

重いことばが胸にささっている。

（教団総会副議長 久世そらち）